

卷頭言

植物防疫業務を振り返って思うこと

沖縄県農業研究センター 作物環境総括 おや ふ そ 親 富 祖

あきら
明

今年の5月に2025年度九州病害虫研究会会長に指名されたことに伴い、植物防疫の卷頭言の執筆依頼がありました。本来文章を書くのが大の苦手でありお断りしようかと思ったのですが、歴代の会長の方々が執筆していらっしゃるということでしたので、そういうことであればと依頼を受けることにしました。何を書こうか大変悩みましたが、30年余りに及ぶ公務員生活の中で、これまで私がかかわってきた植物防疫業務について書きたいと思います。

1992年4月に沖縄県に入庁し、今年で34年目となります、その間、植物防疫関係の業務としては、農薬の残留分析業務、農薬行政、害虫研究、そして病害虫防除機関の長などトータルで25年携わってきました。

最初の勤務職場は「病害虫防除所（以下、防除所）」で、そこでは農薬の残留分析業務に従事しました。沖縄県では植物防疫対策の効率化を図るため、1987年に農業試験場にあった病害虫発生予察業務および農薬残留分析等の業務を防除所に統合しておりました。そこで8年間、農薬の安全追跡事業として作物や土壌、河川中の残留農薬分析を行い、また、生産団体等へ農薬安全使用を啓発するための分析業務も行っていました。その他には、ゴーヤー、マンゴー等のマイナー作物について、作物残留試験を実施し、農薬登録の適用拡大を進めていました。

その後、2000年に農業試験場宮古支場（現 農業研究センター宮古島支所）に異動となり、当時、収穫前のサトウキビに立ち枯れを引き起こし問題となっていた「ミヤコケブカアカチャコガネ」の研究に携わりました。「ミヤコケブカアカチャコガネ」の成虫は2月初旬から3月中旬ごろの夕刻に地上へ出現することがわかつっていましたが、成虫の出現条件を明らかにするために、1月初旬から2か月間ほぼ毎日、夕暮れ時から圃場での「張り込み作業（観察）」を行いました。また、幼虫の土中での分布状況を明らかにするために、交尾している成虫ペアを集めてサトウキビ圃場に放飼し、その後、毎月1回小型バックホウを用いて幅1m、長さ6m、深さ1.5mの穴を掘り、圃場の断面調査を実施しました。今思えば一職員の自由な発想を受け入れてもらい、皆一丸となって研究に取り組めた良き時代だったと思います。

宮古島での3年間の勤務後、2003年からは本庁勤務となり、2006年までの4年間農薬行政に携わりました。

当時は農薬取締法の改正で農薬の使用基準の遵守義務や規制強化がなされました、登録農薬が少ないマイナー作物等では、その栽培に支障を来すということで農薬登録を行うことを前提に特例として使用を認める「経過措置」が設けられていました。全国的に農薬の適用拡大が急務となっており、沖縄県では県単独事業を立ち上げ、農業試験場、防除所、普及センターの協力体制のもと適用拡大を進めました。また、他県とも協力、分担し、鹿児島県、宮崎県とはマンゴーやアセロラで、愛知県とはハーブ類で試験を実施しました。適用拡大を進めたことで、沖縄県の農業生産の振興に少しは貢献できたかと思います。

2007年からは「病害虫防除技術センター（以下、防除センター）」で6年間勤務しました。防除センターは、ミバエ類やカンショの移動規制害虫であるアリモドキゾウムシとイモゾウムシの根絶事業を実施していた「ミバエ対策事業所」と「防除所」を統合した組織となります。そこでは、根絶間近の久米島でのアリモドキゾウムシ防除事業（2013年に根絶達成）やうるま市津堅島でのアリモドキゾウムシ根絶事業のスタートにかかりました。その他には、同じくカンショの害虫であるイモゾウムシの人工飼料による大量増殖技術の開発を担当し、累代飼育をスタートさせました。

2014年以降しばらく植物防疫業務から外れますが、2021年から3年間防除センター所長として再度勤務しました。2021年4月に津堅島のアリモドキゾウムシの根絶達成に立ち会うこととなり不思議なめぐりあわせを感じました。2021～22年にかけてはミカンコミバエの再侵入数が過去最多となり、その対応で大変苦労しました。

振り返ると、担当した業務は多岐にわたり、配属先では新たなことへのチャレンジの連続で大変苦しい思いもしましたが、それ以上に楽しかったことも多く、今では「あのころは大変だったな」と笑って話することができます。

今、全国的に若手や中堅職員の離職が問題となっていますが、現在仕事に悩んでいる後輩の皆さんも、もうひと踏ん張りすれば、「あのころは大変だったけれど頑張ってよかったな」と思える日がきっと来ると思います。その日を楽しみに共に頑張っていきましょう。

（九州病害虫研究会 会長）